Chopard Co-President
Karl-Friedrich Scheufele —*Interview*—

CHRONOMÉTRIE FERDINAND BERTHOUD
偉大な時計師の名を受け継ぐ新ブランド

2016年のジュネーブ時計グランプリで大賞を受賞したのは、伝説の時計師の名を冠した新ブランドの第1弾モデルだった。

WISDOM

クロノメーター フェルディナント・ベルトゥー FB1
ケース側面の一部がスケルトン仕様となっており、フュゼ・チェーン機構などが観賞可能。写真の18KWG×チタン製ケースのほか、18KRG×ブラックセラミック製ケースもあり。現代的な素材をミックスし、モダンに昇華させている。販売店もショパールとは異なり、世界で10カ国程度、しかも各国1ディーラーでの展開となる。日本では、東京・渋谷に店を構えるYOSHIDAでの取り扱い。世界限定各50本。手巻き、44mm。
¥27,030,000 **Chronométrie Ferdinand Berthoud**

歴史や伝統を重んじる機械式時計の世界で、誕生したばかりのブランドの大賞受賞を、いったい誰が予想できただろう。2016年、時計業界のアカデミー賞と呼ばれる「ジュネーブ時計グランプリ」で、栄誉ある大賞を見事受賞した時計は、「クロノメトリー フェルディナント・ベルトゥー」の第1弾モデルであった。

「私個人としても、受賞には大変驚きました。素晴らしいこの賞を、新ブランドがすぐに受賞するということは過去にありませんでしたので」と語るのはショパールの共同社長、カール-フリードリッヒ・ショイフレ氏。実はこのブランド、氏がショパールとは別に立ち上げたブランドだ。

「きっかけは、2006年にショパールのマニュファクチュール設立10周年を記念してオープンさせたミュージアム『L.U.C EUM』。『L.U.C（ルイ-ユリス・ショパール）』とラテン語の『lyceum（学びの場）』を合わせた造語で、時計についてきちんと学べる場所を、という私の長年の夢を込めたものです。このミュージアムをオープンさせるにあたって手に入れた時計のひとつが、フェルディナント・ベルトゥーの作品だったんです」

フェルディナント・ベルトゥーとは、18世紀から19世紀初頭にかけて活躍した時計師だ。スイス時計職人の名士の家庭に生まれた彼は、18歳のときにパリに移って仕事を始め、わずか26歳の若さで公式に時計職人マスターの資格を得た。主にマリンクロノメーターの研究に情熱を注ぎ、フランス国王やナポレオンから注文を受けるほどの実力を持っていた。また、生涯にわたり多くの書物を出版し、自身の持つ時計製造の技術を包み隠さずに、広く共有していた。

「彼について学べば学ぶほど、偉大な時計師だったということがわかりました。未来を見据え、革新的な考え方を持ち、人間的にも素晴らしい人でした」

この伝説的な時計師に心を奪われた氏は、すぐにその名前を使用する権利を手に入れるべく動きだした。

上：王と海軍の時計・機械職人の資格を授与されたフェルディナント・ベルトゥー（1727−1807）。左：フルリエのミュージアム「L.U.C EUM」に保管されている「マリンクロックNo.6」。コンスタントフォース機構とフュゼ・チェーン式の伝達装置を備えたムーブメントは、左ページの時計のインスピレーション源のひとつとなった。

Karl-Friedrich Scheufele
カール-フリードリッヒ・ショイフレ

1958年ドイツ生まれ。ローザンヌの経営大学院を経て、父が経営を受け継いだショパールに入社。その後、妹のキャロラインとともにグループを経営。クラシックカーレースの出場やワインショップの経営も手がけるなど多趣味。2006年に「フェルディナント・ベルトゥー」の権利を取得。ショパールとは別ブランドとして立ち上げ、2015年秋に第1弾モデルをローンチした。

「彼は機械式時計史において大変重要な存在でしたが、専門的な知識を持っている人々の間でしか知られていなかった。ですから私は、この素晴らしい時計師の名を世に知らしめたいと考えました」

しかし2006年に権利を手に入れてから、具体的なプロジェクトが動きだすまでには年月がかかった。

「きちんと意義があり、彼へのトリビュートとなる形で、蘇らせたかった。単に彼の名前をつけて技術を取り込むだけではなく、革新的であるという精神をも受け継ぐ必要があった。つまり現代人に寄り添った、まったく新しいオリジナルでなくてはならないということです」

かくして生まれたのが第1弾モデル、「クロノメーター フェルディナント・ベルトゥー FB1」である。

「とてつもなく複雑な腕時計です。マリンクロックで採用されていたフュゼ・チェーン機構を、腕時計のための小さなムーブメントに再現しています。自転車のチェーンと同じような仕組みのこの機構だけで700以上のパーツからできている。完成させるには技術的にもチャレンジングで、開発にかなりの年月を要しました」

興味深いのは、このプロジェクトがショパールとは切り離されて開発・製造・販売されているということである。

「世に知らしめたい半面、年間に製作できる本数は非常に少ない。超ニッチなマイクロブランドとして、大切に進めたかったんです。私の個人的な思いや情熱から生まれたともいえるブランドなので」

初代モデルでのいきなりの大賞受賞で一躍脚光を浴びたわけだが、今後の展開をどのように考えているのだろうか。

「まずはこのモデルをきちんと納品すること。月に2本程度を製造し、限定数が終了したら次のモデルに移行します。ですから機会を逃すと二度と買えなくなる時計です（笑）。新モデル？もちろん同時進行で開発を進めていますよ。まったく別のムーブメントを搭載したいと思っているので楽しみにしていてください」